

## 土戸敏彦教授最終講義「去る、逝く、終わる」

土戸，敏彦  
九州大学大学院人間環境学研究院（教育哲学）

<https://doi.org/10.15017/1905834>

---

出版情報：教育基礎学研究. 9, pp.3-16, 2012-03-30. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

## 土戸敏彦教授 最終講義 「去る、逝く、終わる」

2012. 3. 2

九州大学箱崎キャンパス文系地区  
文系講義棟102号室

ただ今紹介いただきました土戸です。とうとう定年を迎え、九大を去ることになりました。定年というものは、読んで字のごとく、決まった年齢になれば、自然に、否応なくやってまいります。そして、職を退く、職場を去る、ということになります。言ってみれば、それだけのこともかもしれません。私も、これまで多くの先輩先生方の、定年退官・定年退職を見届けさせていただきましたが、要するに、その時期が来て去って行かれるということなんだと、どこか醒めた見方をしておりました。つまり、自然なことという受け止め方をしておりました。ところが、今、そのことが自分にやってきた、自分自身のことになった、ということになると、これはそう簡単なことじゃないなという気がしてまいりました。つまり、とても重い事がらではないかと。とくに、過ぎ去った年月を振り返りますと、少なくともこの私にとっては、九大を去るということに非常に重大な意味があると思えてまいりました。そういうわけで、この九大を去るにあたりまして、できるだけ、このことについて、いわば大袈裟に語ろうと思うんですね。つまり、この定年退職の意味を大袈裟に、大仰に拡大して、去るということを、ある意味で仰々しく考えてみたいと、そんなふうに思うわけです。そこで、こういうタイトルにさせていただきました。「去る、逝く、終わる」と。

### （「去る、逝く、終わる」という題目について）

最初は、パワーポイントで、ということも考えたのですが、どう見ても、このタイトルは、そんなテクノロジーには似合わない、ミスマッチもいいところだという気がします。できるだけアナログに、訥々と語る、そういうスタイルが、このテーマには似合っているように思います。

こんなタイトルにした理由ですけれども、私は元来へそ曲がりな性格なものですから、自分の研究歴を振り返って学問的業績を披露する、そういう紋切り型のスタイルにしたくない、というのが最初の理由です。二つ目は、「最終講義」の、「講義」の部分はさておいて、「最終」の部分に強調したいという気持ちからです。つまり、最終、最後、終わる、ということを強調したいということが、このタイトルにつながっております。三つ目は、語呂のよさということです。「去る、逝く、終わる」、これは「二、二、三」の

リズムですよね。語呂がいいということは、何かをアピールする際にはなかなか有効なことではないか、と思います。

この題目ですが、実は、題目を届け出ると言われて、咄嗟に思い付きで考えたところもあるんです。そんなに深く考えわけではありません。しかし、いったん出してしまえば、今、この場では、もう動かせないタイトルになってしまっています。

そして、この「去る、逝く、終わる」ですけれども、こんなふうに並べたとき、最初の「去る」と、三つ目の「終わる」はいいとしても、二番目の「逝く」はちょっと穏やかでないなと感じる方がおられるかもしれません。私も、少しデジタル辞書で調べてみました。すると『広辞苑』では、「行く」「往く」「逝く」の三つが基本的には区別されておられません。「いく」と「ゆく」というふうに二つの読み方があるのですが、「いく」という読みについては、『広辞苑』では、「行く」しかないんですね。「ゆく」の方は、この三つが同格で並べられていて、区別されていません。一方、『大辞林』では、「ゆく」の読みにおいて区別されています。「いく」という読み方では、「行く」「往く」「逝く」の三つが同じように並べられていますが、「ゆく」については、「行く」「往く」に対して「逝く」が意味上、区別されている。そういうようなことで、この逝去の「逝く」は、ややニュアンスに差があるけれど、行く末の「行く」、往生の「往く」と、それほど違いはないように思われます。ただ、逆に、さほど違いはないけれど、ややニュアンスの差はあるとも言えるかもしれません。

ところで、そのようなことを踏まえた上で、定年で退職するというのを、人生の終わり、この世を去るということに、あえて重ねて考えてみたいと、いう気持ちがございます。



(回顧 — 「教育哲学」にたどり着くまで)

そのことについては、後でまた考えることにしまして、まずは、私が専門としている教育哲学に、私がたどり着くまでの話を少しさせていただきます。振り返るほど私はたいたものを残したとは思っていませんが、これまでの道のり、来し方のエッセンスを、少し紹介させていただきます

研究に関するだけでなくその前からちょっとたどってみますと、大学は、もともと理系に入学しております。略歴にありますように、入ったところは京都大学理学部です。子どもの頃から、そういう傾向はあったようです。中学時代には、試験管とかフラスコなどを自分で買ってきて、自宅でいろいろ実験をしていました。高校時代には、大阪の日本橋に行っているんなパーツを買い込んできて、トランジスタ・ラジオを組み立てる、というようなこともやっていました。大学時代には、自動車に関するサークルに所属して、全国の学生整備大会がたしか豊田市であったのですが、それに参加し、残念ながら優勝はしませんでした、3位か4位くらいに入賞しております。それから現在も、デスクトップのPCはこの間自分で作ってきました。今まで10台以上自作したでしょうか。そういうわけで、今でもいわゆるサイエンティフィックなこと、テクノロジカルなことというのは嫌いじゃないです。なので、大学に入る頃は自他ともに、自分も周りの者もみんな理系の人間だと思っていて、当然のように理系に進んだわけです。ところが、大学の2年生頃に、それまでの自分からすると、はなはだ奇妙な考えに囚われるようになった。どんなこと考えたかという、とくに人間についていろいろ考えるようになりました。人間というのは、いわゆる自然の軌道、ルールから脱線しているのではないだろうか。この最近の講義までずっとその話をしてきていますから、その意味では昔から現在まで一貫しているのかもしれませんが。要するに、人間は他の動物と、決定的に違うんじゃないか。

そのとき考えたことの一例ですが、他の動物は、食べるのもセックスするのも、大っぴらに行ない、なんらそこに違いはない。ところが人間だけはなぜか、レストランでみんなと一緒に食事をするのに、セックスすることだけは秘め事できゃいけない、というようなことです。そんなことが、非常に不思議なことに思われはじめたのですね、なぜなんだろうと。

あるいは、〈生きる〉ということについて、人間だけがその意味を考えてしまう。何のために生きているのか、というようなことですね。他の動物は、もうただただ、ひたすら〈生きる〉そのことになりきっている。それに対して人間だけは、今生きているということについて、これはどういうことなんだと考えてしまう。なぜなんだろう。そのようなことに、そのときから囚われ始めたのです。そしてさらに、この講義のテーマと関係することですが、その〈生きる〉ことが「終わる」、生が「終わる」、つまり死ぬということですね、これはそもそもどういうことなのだろう。そんなことが、大学2年生

の後半くらいの私の頭をいっぱいにした。今まで自分の中で当たり前だった日常的な事が、当たり前でなくなってしまったのです。

理学部の専門課程では化学科に進んだのですが、毎日、午後からは実験でした。うまくいかないんですね、実験って。だから、夜8時9時っていうのはもうしょっちゅうでした。毎日夜遅くまで実験やっていたんですけれども、今言ったような妙なことを考えるようになってからは、化学実験どころじゃないっていう気がしてきました。時あたかも1969年、いわゆる大学紛争、学園闘争の時代、全世界的にそういう気運が高まった時代なんですけれども、「大学とは何か」、「学問とは何か」ということが盛んに議論されました。そんなことも背景にあったと思います。そういうわけで、何かわからないけれど、しかしその何かを、とことん考えてみたい、徹底的に考えてみたいと、いうふうに思いました。そこで、学部を変わることを考えました。自分が考えていること、考えようとしていることはたぶん哲学的なことなんだろうなと思いましたが、ただし、純粋に哲学そのものを学ぶか、それとも教育学部に移って人間について考えるか、少し迷いました。結局、教育学部に移ることにし、結果的には、教育学部に転学部してよかったなと思っています。いろいろ理由がありますが、一つはその縁で、つまり、教育哲学を専攻したおかげで、この九大に来ることができた、ということがあります。それだけではもちろんありません。教育学というのは、ご承知の通りいろんな分野が集まっておりますが、教育学の中の、まったく性格の異なる他の分野に触れることができたこと、これも私にとって非常に幸いなことだったと思っています。しかし、教育学部が変わってよかったという最も大きな理由は、純粋な哲学そのものではなくて、教育哲学を専攻したおかげで、〈子ども〉と〈大人〉という問題ないしテーマにたどり着けたことです。今となっては、このことが、私にとっての最大のポイントだったんだな、という気がしています。

### 〔「教育哲学」について〕

そういうふうにして教育哲学を専門とするようになったのですが、ところでこの教育哲学というものがそもそもわかりにくい。教育哲学というのは一つの体系ではまったくありません。つまりいろんな教育哲学の考え方や立場があり、あるいは種類の違う教育哲学がいろいろ存在する。おそらく、これは教育哲学に限らず、他の学問分野についても同じようなことが言えるのかもしれませんが。とにかく教育哲学は一つのものではないと、いうことです。そんな状況のなかで、私はさ迷うしかありませんでした。

大学院を出て、大谷大学という私立の大学に就職したのですが、まだその若い頃にドイツの（当時まだ西ドイツですが）教育哲学の、ある流派に少し興味を持ちました。当時の西ドイツの教育哲学というのは、いくつかの流派に分かれていました。主流と言われる3つ立場があったのですが、その3つの立場ではない、もっとマイナーな流派ない



し立場に関心を抱きました。で、就職後10年経ったぐらいの段階で、その流派のもとに在外研究をしました。その立場を代表している教育哲学者がいて、その2人の教育哲学者がいた大学、これが西ドイツのデュースブルク大学という大学でした。デュースブルクという町は、ドイツの中でも西の方にあり、やや北、オランダの国境近くです。私が住んでいたアパートの目の前にライン川が流れていました。窓の外はライン川の堤防です。ライン川を渡って向こう行くとすぐオランダという、そんなところでした。そしてそのデュースブルクの近くにエッセンという町があり、そこにエッセン大学という大学がありましたが、今ではエッセン大学とデュースブルク大学が統合されて、エッセン・デュースブルク大学になっています。この大学が現在、九大と提携関係にあるはずです。そういう意味でも、今思えば縁があったんだと思います。

ともかくそのデュースブルク大学に、30代の終わり頃、九大に来る前ですが、1年半ほど在外研究をいたしました。その二人の教授のことですが、私が行った当初は、二人で共同講義をするほど非常にいい関係でした。ところが、1年半経って私が帰国する頃には、まったく口をきかないくらい二人は悪い関係になっていました。学說的・理論的に最初から微妙な違いがあって、そのことがもちろん関係していたのだらうと思いますが、ただ、二人の関係が悪くなったのは、私のせいかもしれないという気もしています。というのは、その理論的差異に、私が絡んでいたようなんです。まあ憶測ですけども、その微妙な差異の傷口を私が広げてしまったんじゃないか。真相は不明です。実際はどうだったのかわかりません。ともかく、そんなふうにして、1年半の間に何がしかの貴重なヒントをもらって帰ってきた。そして、帰ってきてその3年半後に、この九大に移ってまいりました。この九大で、私なりの教育哲学というものを、とりあえずイメージすることができるようになったということです。

それをごく簡単に示したいと思います。「教育哲学」という言葉ですが、これは、見た通り、「教育」という言葉と、「哲学」という言葉から成り立っています。普通、教育哲学者たちは、これをほとんど例外ないと言っていいくらいに、「教育の哲学」、あるいは「教育についての哲学」というふうに考えています。もちろん、これはごく自然なことだと思います。ところが私は、この「教育哲学」をそういうふうには理解しなかった。これを、「教育と哲学」という意味に取った。つまり、「教育」と「哲学」が、ある種の対峙関係にあるのではないかと考えたのです。ある意味非常にユニークというか、突拍子もない考え方かもしれないですけども、そういうふうには考えた。

では、「哲学」と「教育」のそれぞれはいったい何を意味しているのだということになります。まず「哲学」の方から説明します。「哲学」というのは、一言で言うと〈子ども〉の問いです。ただし、この子どもには、括弧がついています。山括弧と、仲間内では言っていました。先ほどちょっと調べたら、この山括弧というのは何も仲間内の用語ではなくて、一般的な言葉らしいですね。専門的にはギョムって言うようです。哲学は、その山括弧つきの〈子ども〉の問いであるということです。哲学が〈子ども〉の問いであるという考え方は、今では全然珍しいことではありません。このような見方は、すでに何人かの哲学者や理論家がしています。なぜ哲学が〈子ども〉の問いなのかということですが、たとえば幼児、小さな子どもは言葉を覚えたとき、「なぜ」「どうして」という問いを頻りに発するようになる。その問いというのは、たとえばこうですね。「昼の空は青いのに、夕焼けはなぜ赤いの?」「猫にはどうしてシッポがあるの?」私がよく用いる例は、「お月さまは、なぜついてくるの?」つまり、月が出ている夜道を子どもと一緒に、手をつないで歩いていると、子どもが、大人に聞くんですね。歩いても歩いても、お月さまはついてくる、なぜついてくるのか。しかしそう尋ねられても、大人は答えに困ってしまいますよね。どう答えますか?「お月さまは、なぜついてくるの?」と聞かれても答えにくい。なぜかという、大人には、そんなことは当たり前になってしまっているからです。当たり前になっていることは、かえって答えにくいですね。しかし、子どもはそういうことを素朴に不思議に思うわけですね。大人が当たり前に行っていることを、子どもは不思議に思う。実は、哲学というのは、どんなに難解に見える哲学でも、最初の一步は、ごく素朴な問いなんです。言うならば〈子ども〉の問いだということ。そういう意味で、哲学というのは、〈子ども〉の問いであると。

〈子ども〉の問いの中でも、いろいろありますが、こういうのもありますね。「死んだらどうなるの?」これは今日のテーマに関係がありますね。

以上が「哲学」ですが、それに対して、「教育」というのはどういうものかと言えば、これも一言でいうと、〈大人〉の営みだということになります。山括弧のついた〈大人〉の営みです。極論してしまえば、「教育」というのは、当たり前に行なうことです。ちょっと難しい言葉で表現すれば、自明化すること、自明化させること、自明なことにしてし

まうこと。不思議な思いを、当たり前にさせてしまう、当たり前と思うに到らせる、そういう営みであると、いうことですね。たとえば、躰とか、まさにそうですね。理屈抜きで、当たり前になっちゃいますね。その他、たとえば漢字を覚えるとか、九九を覚えるとか、まあいろんな知識を身に付ける、あるいは道徳的なことを身に付ける。そういうことがすべて、言ってみれば、当たり前になる過程ですよ。最初は、なぜそういうふうにするの、なぜこれを覚えなきゃいけないのと言っていたのが、どんどん取り込んで、あるいは取り込まれて、そうするのが当たり前というふうになる。それが、大人になるということかもしれないですね。

当たり前になるということで、別の例を挙げておきます。私たちは感謝するとき、「ありがとう」と言います。日本語で「ありがとう」と言う。なぜ「ありがとう」と言うのか。考えたことがある人もあるかもしれませんが、考えたことがないという人もいらっしゃるでしょう。何で「ありがとう」と言うのか。「ありがとう」というのは、よく見ると「有難し」、有りにくい、めったにないという意味ですね。めったにないということが、どうして感謝の意を表すのか。これは、われわれ、ふだんそんなこと考えないですね。ただ、日本語をはじめて学ぶ人の中には、そんなことを考える人がいるかもしれません。「有難い」というのはめったにないという意味なのに、なぜthank youになるのかと。つまり、われわれには、「ありがとう」が当たり前になってしまっているわけですね。「ありがとう」に限らず「こんにちは」も「さようなら」もすべてそうです。「こんにちは」というのは、一説によると、江戸城に詰めている当番の侍同士が、交代するとき、あいさつで「今日（こんにちは）は、お役目ご苦労でござる」と言った。それが「こんにちは」の始まりだという説があります。「さようなら」はわかりますね。「さようならば」、「それならば」ということですね。「それならば」というのが別れのあいさつになっているというのは不思議ですよ。でもこれみんな当たり前になっています。このあいさつ言葉に限らず、すべての言葉についてそれは言えると思います。とにかく以上のような意味で、「教育」とは、当たり前にするはたらきないし営み、ということが言えるかと思います。

そして、この〈子ども〉／〈大人〉というのをもう少し別の角度から見ますと——〈子ども〉は、良くも悪くも、無秩序あるいはカオスを好む。秩序のない状態を志向する。科学的に言うとエントロピー増大の方向ということでしょう。ありていに言うと、散らかすイメージですね。散らかるイメージあるいは泥んこまみれのイメージです。それに対して〈大人〉というの、ルールあるいは規範を踏まえる、そういう方向性にある。ただし、それは〈大人〉がルールを守るという意味ではありません。気を付けておきたいのですが、ルールを踏まえた上でルールを破るのも〈大人〉なんですね。ですから、正確に言うと、〈大人〉というの、ルールを守る「ふり」をする、そういう存在だ。「ふり」をするということ。〈子ども〉が散らかすイメージだとすれば、〈大人〉は整頓





するイメージですね。ただし整頓するのではなく、整頓する「ふり」をする、それが〈大人〉だ、ということです。

念を押しておきますが、この山括弧の〈子ども〉／〈大人〉というのは、常識的に言われる、あるいはわれわれが常識的に思っている、子ども／大人ではない、ということです。つまり、年齢とか、肉体的な成熟の度合いとかそういうこととは直接の関係はないということです。人間は誰でもこの両方を持っています。つまりこの〈子ども〉／〈大人〉両方の要素を誰でも持っている。もちろん人によって、その割合は異なっていると思います。紛らわしいので、ある時期からこの〈子ども〉／〈大人〉に「性」をつけて〈子ども〉性／〈大人〉性という表現をするようにしています。そうすれば、少しは紛れが少なくなるのではないかと思います。以上のように考えると、人生というのは、いわば自らの内なる〈子ども〉性と〈大人〉性から成り立っていると言えるのではないのでしょうか。つまり、幼児期にすでに〈大人〉性が育まれておりますし、年をとっても、つまり高齢になっても、〈子ども〉性というものはなくなる。〈子ども〉性と〈大人〉性は、せめぎ合いつつ、でも対立ばかりしているのではなく、補い合いもやっているとします。せめぎ合い、補い合いをしながら、人生という織物が織られているということです。この瞬間、皆さん講義を聞いておられますが、こういうふうに静かに講義を聴いているようなときは、皆さんを〈大人〉性が支配しているわけです。それに対して、祭りとか飲み会で、騒いで、はじけるような、そんなときに、〈子ども〉性が顔を出してくる、あるいは噴き出してくる、そういうふうには言えるかもしれません。

（「終わりを知る」ということ）

先ほど触れました〈子ども〉の問いの中に、「死んだらどうなるの？」というのがあ

りました。つまり、この世を去る、あの世へ逝く、生涯を終える、そうすると、そのときどうなってしまうの？ という、そういう問いでしょうね。ところで、この問いは、一般に人間あるいは動物は死んだらどうなるのかという問いではないですよ。つまりそういう、いわゆる客観的な問いではない。たとえば目の前の、この動物が死んだらどうなるのかという問いではない。それだったら、死ぬということは、心肺停止して動かなくなることを意味することになります。そうではなく、〈子ども〉の「死んだらどうなるの？」というその問いは、実は、自分が死んだらどうなるの、私は死んだらどうなるのという、そういう問いなんですよ。ですから、子どもが「死んだらどうなるの？」という問いをはじめて発するとき、その問いの裏に、死ぬのが怖いという思いが含まれていることが往々にしてあります。それは何を意味しているかと言うと、その子どもが死ということに、あるいは死に関する何かにはじめて触れた瞬間であると思います。死というものがはっきりわかったというわけではないとしても、死というものに気付いた、死という何かに気付いた、そういう瞬間である。これをもう一つ言い換えると、自分という存在の終わりがいつか来るんだということの気づき、そういうことだと思いますね。自分の存在もどこかで終わるんだ、いつか終わるんだ、そのことを覚るということですよ。これもまた一つの哲学の出発点ではありますが、自らの死に気付く、つまり、自分の生に終わりがあることを覚るというのは、実は人間だけです。他の動物はそういうことはない。他の動物もわかると言う人がいますが、仮にそうだととしても、それは人間と同じようにしてではない。自らの死に気付く、自らの終わりを自覚するのは、人間だけです。自分の終わりを知っているからこそ、自殺することができる。それを知らなかったら、そもそも自殺するという発想が出てきようがない。そういう意味で、人間だけが自殺することのできる唯一の動物であると言えます。そのことを逆方向から言うと、ある動物が、あるとき、いつか自分が終わる、いつか自分の終わりが来るということにハッと気付いた。今までそんなことは考えもしなかったのに、あるときハッと、自分という存在がいつか終わるんだということに、突然気付いた。そのときその動物が人間になった、人間という存在がそのとき誕生した、と、そういうことではないかと思います。それが、ひょっとするとすべての出発点だったかもしれない。これは私が突飛な仮説として考えていることなんですけれども、言葉というものもそのとき生まれたのではないかと思うんです。自分の死、自分の存在が終わるといふ、そのことを覚った瞬間、言葉が発生したのではないかと思っています。というのは、言葉の究極の原理とは、あるものを、そうでないものから区別する、分ける、分節するということです。それが言語の究極の原理です。その究極の分節の最初に、生と死というものがあつた。自分の生と死、それが言葉の出発点だったかもしれない。そして、それと連動して、時間の観念というものもそのとき生まれたのではないか。つまり、過去とか未来というものはそれまでなかった。言葉を持たない動物にはそんなものなかった。でも、自分の終わり、

つまり死に気付くことによって、過去・現在・未来が分節された。そして、〈私〉ということもそのとき生まれたのではないか。〈私〉の死、終わりを知ることによって〈私〉そのものが生まれる、ということですね。

ところで、自分の生に終わりが来ることを覚る、気付くという瞬間、これはものすごい衝撃じゃないかと思います。誰にも、例外なく終わりはやってくる。いつかわからないけど、いつかは終わるということだけは知っている。ところが、他人事のように思っていた死が、実は自分自身の問題だと、そのことに気付いたとき、それはものすごいショックだと思うんですね。我が身にも、いつか終わりが来る。その事実にとえ漠然とであれば、はじめて気付いたその瞬間って、まあものすごい瞬間でしょうね。それと同じではないですが、ちょっと考えやすいように似たようなことを申しますと、誰でもいつかは死にますね。そのことはみんな知っている。十分知っている。了解済みである。なのに、ある日、「あなたは癌に冒されています」と医師に告げられたとき、つまり癌を告知されたとき、おそらくほとんどの人がものすごいショックを受けるでしょ。このショックと、どこか似たところがあるんじゃないでしょうか。つまり、はじめて自らの終わりを知るといこととね。もちろん同じではないですけど。そこから類推すれば、そのショックはものすごいということがわかるのではないかと思うんですね。

ふだん意識することはほとんどないですけど、人間は自分がいつか死ぬということに、一度は気付いてしまっている。そしてそれ以来、どこか頭の片隅にそれを置いているんですね。このことを系統発生的に、あるいは人類発史的に言えば、先ほど言いましたように、人類が誕生した瞬間がどこかにあるわけですね。自らの存在の終わりに気付いたとき、そのとき人間が誕生したということです。それが類人猿から人間になった瞬間ではないかと思います。そしてそれが系統発生的な観点だとすれば、個体発生的に見ることもできますね。つまり、生まれたときの赤ちゃんは、自らの死に気付いていない。しかし少し成長して、どの段階でかはわかりませんが、自分の存在の終わり、つまり自分が死ぬということにどこかで気付きます。先ほど言いましたように、「死んだらどうなるの？」という問いを発するとき、それが、その子どもの中の何かが大きく変わる、そういう瞬間であるように思います。

### 「去る」ということ、「終わる」ということ

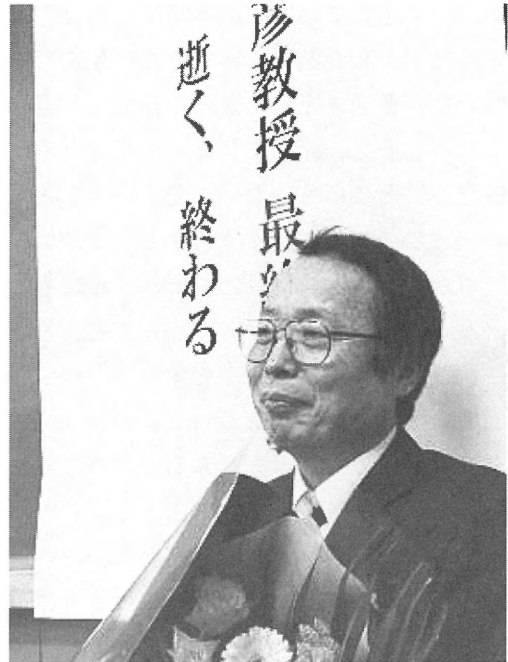
そのようにして、生の終わり、つまり生きることが終わる、この世を去るということ、知る、気付くことになるのですが、この定年退職、この私の定年退職というのは、この世を去ることの、一種のシミュレーションなのかもしれないな、という気がしているんです。もちろん違いはあります。定年は、あらかじめ決まっている。そのときになれば、予定通り、あるいは段取り通りやってくる。それに対して、この世を去るというのは、ほとんどの場合、いつなのかははっきりしていません。不確定です。そういう違い

は確かにあるのですけれども、しかし、この九大という空間から去る、消えるということを、この世という場から去る、消えるっていうことの、レベルはまったく違うとしても、ある種のアナロジーとして考えることができるのではないかという気がします。あるいは、そんなふうに考えてみたいと思うのです。

実は、去年の初めくらいですけれども、ある関西の私立大学から、退職したらすぐに大学に来てくれないかという話がありました。つまりこの4月からですね、この4月から着任してもらえないか、というお話です。私はそれに対して、「退職してすぐに、というのは勘弁してほしい。少なくとも1年間は、休養したいん

です」という希望を述べさせていただきました。たしかに、休養したいという気持ちはあったんですが、本当のところは別のことを考えていました。というのは、退職後、引き続いてすぐに次の職に就いたとすれば、「去る、逝く、終わる」という気分は決して味わえない。この気分を味わいたかった。正確には、「去った、終わった」というその余韻を味わいたいと思ったんですね。4月1日以降、きっとその余韻を噛みしめるのだろうと思いますが、その余韻を味わいたがために、「すぐに」というご依頼はお断りしました。

そして去年、今から言えば半年以上前、研究室の整理を始めたんです。退職準備ですね。整理をしながら、これは、いわゆる生前整理に似ているなと思いました。『生前整理』という本も買いました。ただ、死ぬ前なのに、なぜ「生前」っていうのかなということを、ちょっと不思議に思いましたね。死ぬ前、でしょ。なのに、どうして「生前」っていうのでしょうかね。不思議だなって思いましたけど、それはさておき、とにかく書類、本の整理、あるいは処分が大変でした。まだ今も続行中ですが、ほんとに大変なんです。大事だと思って残していた書類、資料などが、20年間分積もってるんですね。簡単にごみ箱に捨てられない。もちろん捨ててもいいものは捨てましたが、ごみ箱に捨ててはいけないものもいろいろある。分類しながら、シュレッダーにかけたりしました。その小分けしながらの作業というのは半端じゃなかったです。せっかくいただいた紀要類とか、学会誌等々、ほんとに捨てるに苦かったですけれども、涙を吞んで捨てさせていただきました。「断・捨・離」という言葉がありますが、この言葉が実感として感じられました



ね。今も感じています。本当にこれは、現代人に求められる心構えだと思います。

先ほどから問題になっている「死んだらどうなるの？」という問いなんですが、この問いは、普通、死んでからの自分はどうなるのかという、意味としてはそういう問いですね。しかし、死んでしまったら、どうなるものにもないのではないかと。そこに自分はいない、どこにもいない、そういうことではないか。この〈私〉というのどこにもない。どこへ行ってしまうのかという問いに対して、あの世だとか、来世だとか言う人もいるかもしれないけれど、それは誰にもわからない。私自身はたぶんそんなものはないだろうと思っています。だから、死んだら〈私〉そのものがなくなる、単純にそういうことではないかと思うんですね。

そこで、これ、つまり「この世を去る」ということから、「大学を去る」ということをアナログ的に考えてみるとどうなるかということなんです。親しい人がこの世を去ったとき、私たちは、その人のことを、しみじみと思い起こします。その人は、もはやいない。もうどこにもいない。だから、その人の生前を偲ぶしかない。ただし、その意味で、去った人、逝った人は、つまりこの世からいなくなったんだけど、私たちの中に生きている。その人を偲ぶ人たちの中に生きている。実はそのことが大事なのではないか、そう思うんですね。そこで、アナロジーとして定年退職を考えるということになるのですが、ただし、とはいえ、この世を去ることに対して、定年退職の方は、この私がこの後いなくなる、消えてなくなるわけではない。定年退職しても。「第二の人生」というものもある。

私は、実は広島風のお好み焼きを焼くんですけども、これがけっこう評判がよくて、リクエストが絶えないくらいなんです。この大学の中でも2、3回、自分の鉄板を持ってきて焼いたこともあります。なので、退職をしたら、お好み焼き屋を開け、居酒屋をやれというような声もあるくらいなんです。それはそれで非常に結構な話だし、また考えさせてもらいますけれども、ただ、しかし、です。今、この場にいる私、この最終講義をしている私にとって、最も肝心なことは、そこにはない。つまり、「第二の人生」にはない。この世を去るとした場合と同じように、九大を去るに際して、今、最も大事にしたいことは、人々の心の中に生き続けることではないかなと、そういうふう思うんですね。なにもそれは、多くの人々の心である必要はない。日本中、世界中の人々のような、そんな多くの人々でなくていい。ごく親しい、ごく近い人々でいい。そして、個人的に思うのは、業績とか手柄とか、名声とか肩書き、そんなものを通してではなくて、ただただ、縁のあった人、そういう人の心の中に、シンプルに生き続ける。そういうことをむしろ望みたいと思います。たとえば私個人としても、この世を去った人で私にとって大事な人というのは、かならずしも名声とか功績とかそんなこととは何の関係もない。にもかかわらず、その人は私にとって大切な人であり続けています。この大学を去る場合も、同じことが言えるのではないかな、と思っています。

この九大を去ることは、正直言ってとても寂しいことです。しかし、親しい人が、私のことを少しでも覚えてくれていると思うことができたならば、この九大を去ることが、少しは寂しくなくなるかもしれません。

「去る、逝く」ということのシミュレーションをすることによって、この後ですね、本当の逝去、この世を去るまで、まだ時間は少しあると思うんですが、それまでの間、少しはましな、よりよい生き方ができるのではないかな、と思います。そのことを内心望んでおります。

この20年間、九大から、あるいは多くの同僚、友人、知人、その他の皆さんから、とても大切なもの、大事なものをたくさんいただいたような気がしております。それは、目に見えるものではないかもしれない、言葉にできないものかもしれない、けれども、大切なものを頂戴いたしました。そんなふうに思えるのは、これが「去る、逝く、終わる」、そういうときだからこそではないかなと思います。「去る、逝く、終わる」ということに大きな意味があるとすれば、そのこと、つまり過ぎた時間が、大切なものをくれたということに気付かせてくれるからではないかなと、思います。

皆様方に、本当に心から感謝申し上げます。これをもって、最終講義を文字通り「終わる」ことにします。ありがとうございました。

#### 【略歴】

昭和22年12月 大阪府にて生誕  
昭和41年 3月 大阪府立茨木高等学校卒業  
昭和41年 4月 京都大学理学部入学  
昭和44年 4月 京都大学教育学部へ転学部  
昭和46年 3月 京都大学教育学部卒業  
昭和48年 3月 京都大学大学院教育学研究科修士課程修了  
昭和51年 3月 京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得  
昭和52年 4月 大谷大学助手  
昭和53年 4月 大谷大学専任講師  
昭和61年 4月 大谷大学助教授  
昭和62年 4月 西独デュースブルク大学にて在外研究（～昭和63年 8月）  
平成 4年 4月 九州大学教育学部助教授  
平成10年 4月 九州大学大学院人間環境学研究科教授  
平成12年 4月 九州大学大学院人間環境学研究院教授  
平成16年 3月 博士（教育学）（九州大学）  
平成24年 3月 九州大学 定年退職

#### 【本日の講義に関連した著書・論文等】

『超越論的批判教育学』の意味するものとその射程』『教育哲学研究』、第61号、37-49頁、1990年 5月  
『人間形成の基礎と展開』（共編著）新谷恭明・土戸敏彦共編著、コレール社、1999年 4月  
『冒険する教育哲学——〈子ども〉と〈大人〉のあいだ』（単著）、勁草書房、1999年 6月  
『〈遊〉なるがゆえの〈子ども〉の教育不可能性』『九州大学大学院教育学研究紀要』、第 5 号、123-39 頁、2003年 3月

『〈きょういく〉のエポケー第3巻・〈道徳〉は教えられるのか?』（編著）土戸敏彦編著、教育開発研究所、2003年5月

「〈子ども〉論から見たニヒリズム」『九州大学大学院教育学研究紀要』、第6号、39-53頁、2004年3月

「『終焉の自覚』から人間が誕生したとすれば……」『教育哲学研究』、第95号、89-100頁、2007年5月

「『ふりをする』ことの伝授としての教育」『九州大学大学院教育学研究紀要』、第11号、99-109頁、2009年3月

